

メディア文化黙示録

インターネットの巻

山本 政人

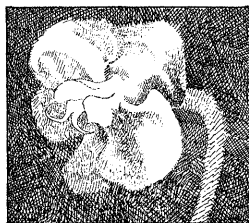
メディアというインターネットを取り上げないわけにはいかないが、文化への影響は未知数である。膨大な情報が交換され、それがかつてなかった事態をもたらしていることは確かである。

ネットオークションというものがある。インターネットのオークションサイトに個人や業者が出品し、それを購入したい個人がその品物を競り落としていくものである。出品や入札が二十四時間、匿名でできるという便利なもので急速に拡大したが、さまざまなトラ

ブルも発生し、曲がり角に來ているようである。

お金を振り込んだのに品物が送られてこない詐欺などは論外として、送られてきた品物に瑕疵があつたり、逆に売り手に買い手から身に覚えのないクレームがつけられたりといったトラブルは結構あるらしい。そしてそこから深夜の無言電話や嫌がらせのメールといった事態に発展することもあるらしく、そういう話を聞くと、インターネットの「功罪」を思わないわけにはいかない。インターネットを通じて見ず知らずの相手とコミュニケーションができるようになった反面、その相手がどのような人間で何を考えているかは、あくまでネット上の文字のやりとりで判断するしかなく、そのため行き違いが生じる可能性が大きいということが忘れられているように思える。

「行間を読む」とか「眼光紙背に徹す」といって、先人は文字の背後にある書き手の意図を読み取ることを強調してきた。新しいメディアといつても、結局は文字によるやりとりをしているわけで、意志疎通には自ずと限界があり、またルールが必要となることは明らかである。オークションサイトなどはもちろんのこと、ほとんどのホームページには注意事項やルールが記載されているが、それを読んだ上でホームページを利用する者はおそら



く数少ない。それもまたトラブルの原因となり、ホームページの掲示板などではしばしば「荒らし」が横行することとなる。しかしこの「荒らし」がまた微妙で、意図的に「荒らし」ているものと、そんなつもりはないのに他の発言者から「荒らし」であると認定されてしまう場合があるようである。後者は、最初はちょっとした行き違いで、それがエスカレートして中傷合戦になり、さらに一方が罵詈雑言や意味不明の発言を繰り返すようになる。実はこれはネット上では日常茶飯事で、慣れている利用者はこうした「荒らし」は無視するのが一番であると心得ている。またともに反論したり、たしなめたりすることは「荒らし」をエスカレートさせていくのである。

インターネットの「功罪」の「罪」の方ばかりが目立っているような観がある。しかし、だからインターネットは駄目だとは思わない。異なる価値観をもつ者同士がお互いを理解していく過程で、このようなトラブルは避けて通れないことである。インターネットは相互理解の機会を飛躍的に拡大した。と同時に、トラブル発生の可能性をも飛躍的に増大させたのである。ルールは作らなければならないし、作られていくだろう。「災い転じて福」となるチャンスととらえることもできると思う。

子どもとインターネットということを考えると、子どもに自由にインターネットをさせるのは空恐ろしい。それこそどんなものを見、どんなことを書くかわからない。やはり大人の監視のもとでというのは嫌な感じもするが、その方が安全には違いない。未成年者に

酒や煙草を売らないのは、かなり有名無実化しているとはいえ、ルールであり良識である。それは絶対的なものではないが、集団の規範であり、文化の一部ともいえる。

しかし情報化によって従来の規範は揺らいでいる。インターネットの拡大はそれに拍車をかけている。一例を挙げれば、「なぜ人を殺してはいけないのか」ということが真剣に問われ、確たる答えが見つかからないという事態に至っている。かつて自明であり、そういう問いを発することすら逸脱と見られていた時代とは大違いである。かつてそうした問いは、個人の内部でうたかたのように生まれては消えていたに違いないが、インターネットではそうした個人的な見解が堂々と披瀝され、それに対して「実は私もそう思っていた」と賛同者が次々現れて、ごく少数意見だったものが、気がつくとも市民権を得ているということがある（意図的な情報操作や自作自演もあるようだが）。

インターネットの「功」の一つは、まさしく個人が自由に意見を表明できるところにあるが、同時に意見の対立や誤解が生じるという「罪」の面を伴っている。インターネットにはそうした対立や誤解を解決する機能は備わっていないため、当事者間で解決するか、さもなければ「荒らし」のような形で終わるのだが、後者のケースが圧倒的に多い。

「荒らし」は決しているものではないが、あくまでネット上でのことと考えると気は軽くなる。だからこそ「荒らし」が横行するのかもしれないが、実生活に悪影響を及ぼさな



ればそれでいいと割り切ることもできる。ところが、先述のように無言電話がかかってきたり、いたずらメールが送られてくるとなると話は変わってくる。こうなると現実社会のルールを適用しなくてはならない事態である。問題はインターネット上だけの「荒らし」のような場合である。これに現実社会のルールを適用したものかどうか。現実社会では「言論の自由」といっても制限がある。インターネット上でもそれは必要なのだろうか。

必要かどうかというより、現在は自主規制が拡大しつつある。その最大の理由は、インターネットの「匿名性」の幻想が崩れたためのものである。インターネットにどここの誰がアクセスしているかは、プロバイダにしかわからないと思われていた。ところが、技術的なことは知らないが、そういう技術さえあれば、どこからアクセスしているかはもちろん、その人が誰であるかも知られてしまう危険があるということがわかってきた。匿名だと思って掲示板にいいたい放題のことを書き込んだりすると、とんでもない目に遭う可能性があり、また、「正義の味方」気取りなのか、「荒らし」や問題発言をする人の個人情報調べて公開したりする輩も出てきたりしている。

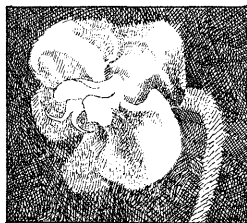
インターネットも資本主義社会の雛形なのだろうか。市場原理のようなものが働いているようにも見える。メディア全般にいえることだが、「悪貨は良貨を駆逐する」ようなところ



ろがある。もつとも、何が「悪貨」で何が「良貨」なのかを判断する基準がそれこそ混沌としている。経済面での「IT革命」は空振りのような感じだが、実は「革命」はすでに起きている。一個人が世界に向けてメッセージを発することができるようになったのは「革命」といつても過言ではあるまい。しかし、「革命」には問題も山積みしている。

個人的な体験からいうと、ネットの世界と現実の生活とのギャップはあまりにも大きい。ネットで触れる情報は、日常生活ではなかなか触れられないものである。そもそもネットにしかない情報があり、それに触れるためにアクセスしている。ネットで入手した情報を日常生活でまわりの人と交換することはあまりないし、したいとも思わない。遠く離れた（実は近くにいるのかもしれない）見知らぬもの同士だからこそ交わせる情報がある。それを周囲の人と交わすのは危険である。自分にしかわからない世界をインターネットは提供してくれる。そのことによって、インターネットは個人の内面世界の拡大・深化をもたらすものだと思う。しかし、内面世界の拡大・深化は、現実とのギャップを広げていくようにも思える。

インターネットはウイニコットのいう「中間領域」のようなものかもしれない。現実と非現実の中間にある領域。そこで人は開放され、遊び、望みをかなえる。しかしいいかえ



れば、現実生活にはそういう場がないのかもしれない。

インターネットにはまると、かえってそれが作り物の世界であることを実感する。これはアニメやゲームにもいえることではないかと思う。現実が厳しくなればなるほど、人は作り物の世界に安らぎを求めるが、それが作り物であることはよくわかつている。作り物の世界にリアリティをもたせるためには、それを具象化した物を集めたり、自らの生活を使つての情報交換などである。とりわけインターネットは、そういうことをしているのが自分だけではなく、自分と同じものの見方、考え方をしている人間がほかにもいるということを教えてくれる。そこにはある種の連帯感が生まれ、人は孤独ではなくなる。

臨床領域では、「居場所」ということが重視され、学校などの「居場所」作りが盛んになりつつある。インターネットも一時の「居場所」になるかもしれない。しかしそれはちよつとした「荒らし」ですぐに壊れてしまうはかないものである。本当の「居場所」はやはり現実生活のなかに必要なものかもしれない。

(学習院大学)